

震災3年

被災地の市民活動を歩く

2月1日～3日にかけて、岩手県陸前高田市を出発点とし、宮城県南三陸町、宮城県石巻市、福島県伊達市と東日本大震災の被災地をめぐる。限られた日数の中で、多くの地を訪ねることが出来なかったのは残念ではあるが、それでも今の被災地の現状を少しでも伝えたいという想いで訪れた。

3年は確かに節目ではあるが、それは、いまなお続く震災の途中経過にすぎない。被災直後は報道でも多く取り上げられたボランティア・市民活動の取組みは、現在に至っては、多く語られることはない。

今後も長きにわたって続いていく復興支援の道の中で、どんな人が、どのような想いで活動を続けているのか。被災地を歩き、そこで繰り広げられる様々な市民活動を追ってみた。





特集

被災地の市民活動を歩く



新青森駅

盛岡駅

関駅

仙台駅

福島駅

陸前たがだ八起プロジェクト
(岩手県陸前高田市)

南三陸町災害ボランティアセンター
(宮城県南三陸町)

sweet treat 311
(宮城県石巻市)

ピースポート
災害ボランティアセンター
(宮城県石巻市)

えがお
小国からの咲顔 (福島県伊達市)



陸前たがだ八起プロジェクト蒲生氏。
後ろ奥に見えるのが戸建ての仮設住宅。

2月1日(土)午後7時28分の新幹線で東京を立った。新幹線に揺られながら、一ノ関で降りると、寒さが肌を刺す。真冬の東北は本当に寒い。

3月11日で震災から3年が経った。全国からボランティアが一斉に駆けつけた時期はすぎ、家を失った人たちは仮設住宅などで避難生活を送っている。その数は被

災3県で21万人を数える。ニューズでは、防潮堤や高台移転、復興公営住宅などの情報が流れ、未だ住民一人ひとりの生活や暮らしが今後、どうなっていくのか、まだ判断出来るだけの材料が整わない状況が続いている。
こうした苦しい状況が続くのか、いま、被災地では、どのようなボランティア・市民活動が行なわれているのか。それは、一時期

の炊き出しや瓦礫撤去などは違う活動が展開されていることは容易に想像されるものの、では、具体的にどんな活動なのか、ハッキリとしたイメージは持っていない。外部団体が継続して活動を行っている地域もあれば、震災をきっかけに新たに立ち上がった団体もあるだろう。彼らは、どのような想いで、また、どんな壁にぶつかりながら、震災と向き合っているのか。今回の『ネットワーク』の企画は、そんな想いで始まった。

翌2月2日、ホテルから一歩出ると雪が降っている。陸前高田へ通じる今泉街道は、アップダウンやカーブが多い道だが、車道にもだいたい雪が積もっており、非常に危険な状態だ。しかし、そんな状況もループ橋を越えて岩手県から宮城県に入ると様相が変わり、道にあつた雪は溶け、走りやすい道路へと変わる。沿岸に近づいてきた証拠だ*1。

住 民の心に 寄り添い続ける

「陸前たがだ 八起プロジェクト」

最初の取材先は、陸前高田市の元オートキャンプ場「モビリア」内にある陸前たがだ八起プロジェクト(以下、八起プロジェクト)である*2。

東日本大震災の震源地に向かって大きく口を開ける広田湾のその右翼を形成する広田半島の付け根部分に、元オートキャンプ場「モビリア」はある。モビリアは、陸前高田市内最大の仮設住宅団地であり、168世帯380人が暮らす。通常の長屋形式の仮設住宅(60世帯)のほか、キャンプ跡地を活用した戸建ての仮設住宅(108世帯)が存在する。戸建て仮設住宅は他の地域にもほとんどなく、また木造ということもあり、一風違った様相を見せている。長屋形式の仮設住宅には主に市内小友地区の住民が入居し、戸建てには市全域から被災者が入居している。

3年を迎える 仮設住宅での暮らし

モビリアの南端に位置する展望所からは広田湾の全景ならびに陸前高田市の市街地が一望できる。元モビリア支配人であり、八起プロジェクト事務局長の蒲生 哲氏(がもうし)は言う。「震災の時は、ここから高田の松原や市街地が津波に飲み込まれていく姿がはっきりと見え

ました。今でも夢のようです」。震災直後、津波に追われ約300人の避難者がモビリアに身を寄せた。蒲生氏は物資配布、炊き出し支援などに奔走した。7月から仮設住宅が建ち始め、支援活動も終わるかと思った時に、一緒に支援をしていたNPO団体から「これからは大事だ。仮設住宅での支援をしないと死者が出る」と言われ、長期的な支援の必要性を感じ、NPO法人取得を決意した。それが八起プロジェクトだ。

1年目は、被災者の助かった命を何とかつなぐ支援だった。2年目に入ると、さまざまな団体が支援に来るようになった。しかし、仮設住宅のドアを1日に5、6回もノックされたり、仮設住宅の集会場では、様々なイベントが入れ替わり立ち代わり開催され、住民からはボランティアさんに悪いからイベントに参加する、という声も聞かれた。「支援疲れ」が被災者に出てきた時期だった。

そして、3年を経て、これからの仮設住宅入居者の生活はどのようなになるのか。蒲生氏は言う。「せっかく助かった命ですから、1人も犠牲者を出さないという想いでやってきました。でも、3年経ってからはキツくなるんです。自力再建できる人たちが仮設住宅から出ていき、気がついたら仮設住宅の中で自分しかない、知り